

平成29年度 長野県上田高等学校 全日制始業式 校長講話

平成29年（2017年）4月5日

おはようございます。

新学期が始まりました。

昨年度から1つずつ学年が上がり、3年生はいよいよ高校生活最後の年を迎え、2年生は学校にすっかり慣れ、いよいよ飛躍の年。それぞれ心に期すことがあろうかと思えます。

みんなが今年1年、どんな高校生活を送るか、とても楽しみにしています。

さて、先月、車で遠出をする機会があって、高速道路を走っていた時のことでした。

今、公務員は、世間の目も厳しいですし、法令遵守を厳しく自分に言い聞かせていますから、高速道路でもそんなにスピードは出しません。左車線、走行車線ですね、そこをゆっくりと走っていたのですが、前がだんだん詰まって来たので、追い越し車線に出て何台か追い越し、再び走行車線に戻ったのです。すると、たまたま大きなトラックの前に出たんですね。たぶん私の入り方がお気に召さなかったのか、ただ単に前に入ったことが気に入らなかったのか、そのトラックの運転手は、幅寄せと言って、車間距離を詰めて私の車をあおって来たんです。ルームミラーで見ると、本当にぴったりくっ付いているように見えるくらいの状況で、ずーっと付いて来るんです。車の経験が浅い頃だと相当にあせったと思います。下手をすると事故を起こしていたかもしれません。どんなにあおられて焦ったとしても、自分で事故を起こしてしまえば自分の責任です。これをジコ責任というわけですが・・・、それは置くとして、私も経験を積んでこの手の運転手にはだいぶ慣れてきたので、無茶なことをするなあと思いつつ、冷静に自分のペースで運転していました。この幅寄せ、あおり、はしばらく続き、その後、インターに差し掛かりました。私は直進でしたが、その車は左側の車線に出て私を追い抜いて曲がって行きました。追い抜かれる時にその車を見たのですが、驚いたのは、その車の横に「〇〇運輸」と書かれていたことでした。しかもその運転手は若者ではなく、結構な年齢の人でした。そういう一定の年齢の人が、その会社の看板を背負いながら、一瞬の怒りに任せてこんな衝動的な行動に走ったことに驚いたのです。私はその会社に連絡することもしていませんし、ネット上でつぶやくこともしていません。今日もその会社の名前を出さずに話していますが、こういう時代ですから、中にはそういうことをする人もいるでしょうし、そうなればその会社は結構大変な騒ぎになるでしょう。組織というのはそういう人も交じているものだとわかってはいますが、少なくとも私がその運送会社に好印象を持たなかったことだけは間違いありません。

でも、これは他人事ではないんです。私も仕事上名刺交換をする機会が結構ありますが、その名刺には、上田高校校長という肩書が書かれていますし、新聞やネット上に記事や写真

が載れば私のことを上田高校の校長だと認識する人は増えます。今でも街中で結構声を掛けられます。私は、もちろん一個人として生きている部分もあるわけですが、実際には、プライベートだからと言っても、上田高校という組織の一員である限り、そのことを常に抱えながら生活をせざるを得ません。

みんなも同じです。もちろんみんな一人ひとり、個人として生きているわけですが、例えば個人として生きていたとしても、上田高校だとか、上田高校何とか班だとか、何年何組だとか、そういう自分が所属している組織の一員という部分を完全に切り離すわけにはいきません。ましてや「上田高校〇〇班」と大きく書かれたジャージを着て街中を歩いている人は、自分で素性を積極的に明かしているわけですから、周囲からは当然そういう人間として見られているわけですし、六文銭や「高學」という校章の入ったジャージを着ていれば上田高校生だとわかります。あるいは、大会のようなものに参加したときに集団としてまとまっていれば、あれが上田高校生か、と認識されることになります。外に出て行かなくても、上田高校にはたくさんお客さんが来ます。その時に、みんなは校舎内でお客さんと接することになります。お客さんが帰る時に、いい雰囲気为学校ですね、となるか、ロクに挨拶もできないですね、となるかは、上田高校生であるみんな一人ひとりの行動にかかっているわけです。

丸山真男さんという政治学者がいました。東大の名誉教授も務めたりしましたが、20年ほど前に亡くなりました。間違いなく知の巨人と言うべき人で、多くの方がその思想に影響を受けたり、師事したりしたのですが、その丸山真男さんの著作に「『である』ことと『する』こと」という、名著と言っていいと思いますが、素晴らしい文章があります。昨日国語の先生に確認したところ、3年生も2年生も「現代文」の教科書に載っているそうですが、まだ授業では扱っていない、とのことでした。興味のある人は読んでほしいと思いますし、今後授業で扱う機会があればその時に今日の話思い出してほしいと思いますが、この「『である』こと」と「『する』こと」は、私が生まれた年の講演をベースにした著作にもかかわらず、少しも古くなっていないところがすごいところだと思います。

その「『である』こと」と「『する』こと」は、丸山さんの学生時代の話から始まります。大学の先生から民法の「時効」の話聞いたことがあって、最初、借りたものを返さない人間が得をする制度はおかしいと丸山さんは感じたのだけれども、「権利の上に長く眠っている者は保護に値しないという趣旨も含まれている」と聞き、なるほどと納得するとともに「権利の上に眠る者」という言葉が妙に印象に残ったというのです。次には、日本国憲法の話が出てきます。日本国憲法には、日本国憲法が国民に保障する自由や権利は、人類が長年にわたって努力を続けてきた結果獲得したものであって、国民がこの先も努力を続けることによって守っていかなければならないものなのだ、ということが書かれていると言っています。

この、民法の時効の話と、日本国憲法の自由・権利の話は表裏一体、同じことを言っていることがわかると思います。

そして、丸山さんは、国民が主権者であることや、日本人が自由であることに触れ、主権者であることに安住して、その権利の行使を怠っていると、ある朝目覚めたらもはや主権者でなくなっているかもしれないし、自由だ自由だといって、自由であることを祝福している

間に、いつの間にかその自由の実質はからっぽになっていないとも限らないと言うのです。

自由は置き物のようにそこにあるのでなく、現実の行使によってだけ守られる、言い換えれば、日々自由になろうと「する」ことによって、初めて自由「であり」得るといふのです。日々主権者であろうと「する」ことによって初めて主権者「であり」得る、これはよく選挙権の行使などで話題になることです。そして、日々自由になろうと「する」ことによって初めて自由「であり」得る。民主主義も同様だと丸山さんは言います。

「である」ために「する」ことが必要で、「する」ことによって初めて「である」ことができるという話だと思いますが、さて、みんなは、いま上田高校生です。今の話を上田高校生にあてはめてみると、上田高校生「である」ためには上田高校生を「する」ことが必要で、上田高校生を「する」ことによって初めて上田高校生「であり」得るといふことになります。上田高校生「である」という点はここにいる全員に共通しているわけですが、どうですか、今の話で、上田高校生を「する」といふことを、ここにいる誰もがしているのでしょうか。

こんにちの上田高校が、曲がりなりにも社会から評価される対象であるならば、それは、これまで、120年近くにわたって、単に上田高校生「である」ことに満足せず、上田高校生を「する」ことをしてきた、あるいは上田高校生を「しよう」と努めてきた、その時々生徒だった皆さん、あるいは、上田高校の教員を「する」、上田高校の保護者を「する」、地域で上田高校の支援者を「する」といふことをしてきてくださった皆さん、さらには卒業して上田高校の卒業生を「する」、支援者を「する」ことをしてきてくださった同窓生の皆さん、といった方々の「する」ことの蓄積の上にあることは間違いないでしょう。

その上に立って、今の上田高校のど真ん中に、今日ここにいるみんながいて、その周りに、ちょうど今のこの体育館のように、我々教員がいるわけです。みんなには、上田高校生という「権利」が与えられている。みんなには「権利の上に眠る者」として高校生活を過ごすのではなく、上田高校生を「する」ことをしてほしいと思うのです。

上田高校生を「する」とはどんなことか、それは、ここにいる一人ひとりがよく考えてその時々で結論を出し、その結論に基づいてしっかり行動してくれればいいことです。

個人としても、それと表裏一体、切り離すことのできない上田高校という集団の一員としても、ぜひとも精一杯上田高校生を「する」ことをしてほしいと願っています。

私も、上田高校の校長「である」ために、今年1年、精一杯上田高校の校長を「しよう」と思います。

ここにいる一人ひとり、全員が、上田高校生「である」ために、今年1年、精一杯上田高校生を「して」ください。

終わります。